



# 大切な君へ



ル・プチ・フランス  
Le Petit Price  
アントワーヌ・ド・サン＝  
ティグジュペリ  
Antoine de Saint-Exupéry

Kei M 訳

地球を出るのに、あの子はわたり鳥をつかったんだとおもう。

---

## 六才の時

---

六才の時、原生林の本を読んだ。「自然のはなし」という本で、大蛇のボアが大きなけものを呑みこもうとしている写真があった。「ボアは獲物を嚙まずに丸呑みにします。そのあと身動きがとれなくなり、消化のために半年間眠ってすごします」、そんな説明がついていた。

それから来る日も来る日もジャングルの冒険のことばかり考えて、自分でも鉛筆をとってみた。これがはじめての絵、第一作目だ。

この大作を大人に見せた。こわい？ と聞くと、

一 ボウシのなにがこわいの。

ボウシじゃない。ボアがゾウをのみこんだところなんだ。しかたがないので大人でもわかるようにヘビの内側もかいた。大人はいつも説明しないとイケない。そしてこれが第二作目。

大ヘビの外側や内側の絵をかくよりも、地理や歴史、計算や文法をやりなさい。大人に言われた。一作目、二作目がうまくかけなかったことで筆を投げた。大画家への道は六才にして断たれた。大人は目の前のものだけでは理解できないものなのだ。

そういういきさつで別の職業につくことにして、勉強したのが飛行機の操縦の仕方だった。世界をあちらこちら飛ぶのに地理はとても役に立った。中国とアリゾナは一目で見分けられたし、夜に方向がわからなくなったときも役に立った。それにまじめに生きている人ともたくさん出会えた。大人と過ごすことが多くなった。それでも大人への印象は小さい時とちっともかわらなかった。

物がわかりそうな人には第一作を見せてみた。絵はずっと持っているのだ。本当にわかる人をいつでも捜していた。けれど答えはいつも同じだった。

一 帽子ですね。

そしてボアや原生林の話や、星の話はしなかった。大人に合わせてブリッジやゴルフ、政治やネクタイの話をした。そして大人は、話のわかる人と会えたとても喜んでくれるものだった。

本当の話ができる人と出会えないまま、ずっとひとりぼっちだった。そして六年前、サハラ砂漠で飛行機が故障した。モーターか何かの不調で、技師も乗客もいなかったの、自分で修理をするしか手がなかった。修理は一筋縄ではいかず、命がかかっている。水は八日分しかない。

その夜、人里から千マイル離れた砂漠でたったひとりで眠った。大きな海をいかだで漂流するよりもさびしい夜だった。だから夜が明けて、子供の声で起こされてどんなにびっくりしたか、想像してもらえらるだろうか。

— ヒツジをかいて。

— えっ

— ヒツジをかいて

雷にたたき起こされたかのように跳び起き、目をこすりながら凝視した。そこには風変わりな格好をした小さな男の子が真剣な顔をして立っていた。、これが後になってかいた絵だ。似ているとはいえないが、こちらの事情もわかってもらいたい。へビの内側、外側をかいて以来、六才にして大画家の道を絶ち、その後いっさい絵な描かなかったのだ。

というわけで男の子の姿に目をむいた。前にも言ったが人里から何千マイルも離れた場所だ。けれどもその子は迷子のようにもなく、疲れて死にそうでもなかった。飢えてもいず、渴きに苦しんでもいなく、怯えのかけらさえ感じさせなかった。砂漠の真ん中で迷子になった子とは、とおにかけ離れていた。

— こ、ここで何をしているんだ。

男の子は、この上なく大切なことを願うかのようにもう一度ささやいた。

— ヒツジをかいて。

謎も、衝撃的すぎるほど無条件に受け入れてしまうものだ。人家から千マイルも離れ、生きるか死ぬかという時にわたしはポケットから紙と万年筆をとり出した。けれど地理、歴史、計算、文法しかやってこなかったことを思い出し、うるさそうに答えてみた。

— 絵はうまくないんだ。

— いいから、ヒツジをかいて。

ヒツジなどかいたことはなかった。けれど男の子のために知恵を絞って、できるかぎりやってみた。ボア一号だ。それを見た男の子がいった言葉には驚かされた。

— ちがうよ。ゾウをのんだボアはいらない。ボアはあぶなすぎるし、ゾウは大きすぎるよ。ボクのところは小さいんだ。いるのはヒツジなんだ。ヒツジをかいて。

いわれるがまま従った。

男の子は絵を見つめて、

— びょうきのヒツジじゃだめなんだ。ちがうヒツジにして。

もう一度かいた。男の子は明るく笑った。でもばかにした笑いではなかった。

— これ、ヒツジじゃない。ヤギだよ。ツノがある。

またもやかき直しになった。

— としよりだね。もっとながいきするのがいいんだ。

もうがまんができなくなった。さっさとモーターの修理にとりかかりたかったので、こんな絵をかいてまくしたてた。

— これが箱。君のお望みのヒツジはこの中だ。

この年端のいかない審判の目が、輝いたのはおどろきだった。

— そう。こういうヒツジがほしかったんだ。草をたくさんたべるかな。

— どうしてそんなことを聞くんだい。

— だってボクのところはちいさいんだ。

— きっとだいじょうぶだよ。小さいヒツジはいってるから。

男の子はのぞきこんだ。

— そんなにちいさくもないよ。あれ、ねてるね。

こうしてわたしは王子と出会った。

王子がどこから来たのか、すぐにはわからなかった。聞きたいことは質問攻めにするくせに、こちらの質問にはどこふく風だ。それでもふとした言葉のはしばしから、すこしづつわかってきた。はじめてわたしの飛行機を見た時、（飛行機はかかない、わたしには難しすぎる）王子が聞いた。

— これなに？

— なになって、飛行機だよ。わたしの飛行機だ、  
操縦できるんだとじまんをするより先に王子が歓声をあげていたた。

— なんだ、あなたも空からおちてきたんだ。

— そうだよ。

— そう言えなくもない。

— すごい！

王子のからからとしたはしゃぎ声にわたしはいらいらした。人の不幸は深刻に受けとってもらいたい。王子は言った。

— そうか、あなたも空からきたんだ。どこのわくせい？

— 目の前の奇妙な子どもの正体が、わかった気がした。聞き返す口調が早口になっていた。

— 君はよその惑星から来たのか。

— 王子は答えなかった。飛行機を見つめてゆっくりと頭をふり、

— そうだよ。これじゃそんなにおくにはいけないね。

— 王子はしばらく考えこんで、それからポケットに手を入れ、ヒツジの絵を出した。なにひとつ話すことなくいつまでも絵を見つめていた。

このほのかに見えた「ほかの惑星」をわたしがどれほど知りたかったか、わかってもらえるだろうか。実際いろいろ聞いてみた。

— 君は一体どこから来たんだ。君の惑星はどこなんだ。ヒツジをどこにつれて行くんだ。

— 王子は深く静かに考えてから、やっと口を開いた。

— はこに入れてくれたから、これをいえにすればいいね。

— もちろんだ。君がいい子だったら昼間つなげるように縄のかいてあげるよ。杭もいるね。

— わたしの言葉に王子はとても驚いた。

— つなぐ？ すごいことかかんがえんだ。

— でも、つながないゃヒツジはどこかに行ってしまうだろう。迷子にでもなったら、  
王子はまた笑いだした。

— どこに行くの？

— どこにでもだよ。どこまでも歩いて。

— 王子はゆっくりと言った。

— だいじょうぶ。ボクの星はとてもちいさいから。

それから気がふさぎそうになったのだろうか。王子は言いたした。

— まっすぐずっとあるいても、そんなにとおくはいけないんだ。

## 王子の星

---

もうひとつ大切なことがわかった。王子のきた星は家ひとつくらいの大きさしかなかったのだ。

それでもさほどおどろきはしなかった。地球、木星、火星、金星、そんな名前がついている惑星はたしかに大きい。けれど他に何百も惑星もあって、望遠鏡で見えるかどうかという大きさのものも多いという。そんな星は天文学者が発見すると番号がふられる。例えば小惑星3251。王子の星は小惑星B612に違いなかった。そう確信したのはわけがあった。

小惑星B612は一度しか確認されなかった。1909年、トルコの天文学者が望遠鏡を覗いて発見し、天文国際会議で大々的に発表した。けれど誰ひとり信じるものはいなかった。それは天文学者の服のせいだ。大人というのはそういうものなのだ。

さいわいトルコ人の発見したB612は後になって汚名を挽回した。1920年、天文学者が亡くなってすぐにヨーロッパの服装をした人が大々的に主張したのだ。とても上品な服装をして議題にもう一度取りあげて、今度は満場一致で承認された。

B612のことをことこまかに話して、数字まであげたのは大人のためにだ。大人は数字が大好きだ。

新しい友だちができたとする。大人は大事なことには耳をかさない。どういう声をして、どういう遊びが好きか、チョウの標本を趣味にしているのか、そんな質問はぜったいにしない。大人が聞くのは「何才？ 兄弟は何人？ 体重は？ お父さんの収入は？」それを聞いてわかったような顔をする。きれいな家があったよ、赤いレンガで窓にゼラニウムがさいていて、屋根に白い鳩がとまっていたんだ」大人はそれでは想像がつけられない。正しい説明はこうだ。「16万フランの家だった」

すると大人は言うだろう。「なんて素敵な家なんだ」

王子についてもたとえばこう説明したとしよう。「王子がいたんだ。元気で笑って、ヒツジをほしがると、ヒツジほしがった、王子だからね」

大人は肩をすくめて子どものたわごとと聞き流すだろう。けれどこう言ったとする。

「王子は小惑星B612から来たんだ」

大人は納得して、もうなにひとつ聞きはしない。そういうものだ。大人に期待してはいけない。大人には広い心で接する必要がある。

けれどももちろん日常において、数字は茶化すためにある。ほんとうはこの話も童話として話してみたかった。

「むかしむかし、とてもかわいい王子がいました。王子は王子とおなじくらいとてもかわいい星にすんでいて、王子はともだちがほしかったのです」

人生というものをわかった人には本当の話として聞いてもらえたことだろう。

けれど軽い話でおわらせたくはなかった。王子の話す思い出は悲しみに満ちていた。王子がヒツジとってしまってから六年たった。忘れないように書き留めておきたい。友だちを忘れるということは悲しいこと。本当の友だちとはなかなか出会えないものだ。そしてわたしは数字にし



か興味を持たない大人になろうとしている。だからわたしは色鉛筆を一箱と鉛筆を買った。この歳になって絵をはじめるのは大変だ。今までボアの内側と外側しかかいたことがない。それも六才のころだ。もちろん、できるだけそのままの姿をかきたかった。けれど完璧とはいえない。上手くかけた絵もあれば似ても似つかない絵もある。身長もちがう。大きすぎたり小さすぎたり。服の色も迷った。かろうじてこれにした。大事なところで間違えたところもある。これは見のがしてほしい。王子は何ひとつ説明をしてくれなかったのだから。王子はわたしを信じたふりをしてただけかもしれない。わたしには箱のなかにヒツジは見えなかった。わたしはもう大人に近かったのかもしれない。もう年をとっていたのだろうか。

毎日あたらしい発見があった。星のこと、旅立ち、そして旅。なにかの機会にふとひらめき、ゆっくりと伝わってくる。三日目にバオバブの話聞いた。

これもヒツジが発端だった。思いつめた顔をした王子がいきなり言った。

— ヒツジが小さい木を食べるってほんと？

— そうだよ。

— よかった。

ヒツジが小さい木を食べて、なにがどうなるのか、わたしには皆目検討もつかなかった。けれど王子はいったのだ。

— じゃ、バオバブも食べるね。

バオバブは小さくはない、教会ぐらいにのびる木で、象の大群をまるごとつれてきても、一本として食べ尽くせない、そう言うと王子は「象の大群」で笑いだした。

— 一頭ずつ上に乗せていかないと。

それから諭すように言った。

— バオバブは大きくなるまでは小さいんだよ。

— それもそうだ、でもどうして小さいバオバブを食べさせたいんだい。

— だって、そうでしょ。

わかりきったことのように言う。けれどわたしには何が何だかわからない。理解するにはかなりの努力が必要だった。

つまり、王子の星にはどこの星とも同じように、生えていい草と生えてほしくない草があった。つまり生えてほしい草の種と生えてほしくない草の種がある。種はどちらも目につかない。種は目につかないまま眠っている。種がなにかのかげんで目を覚ましたくなって、背伸びをはじめ。まずは太陽にむけてそっと、あたりさわりのない茎をのぼす。二十日大根かバラなら好きにのびるにまかせておく。けれどあの星ではわかった時点で抜かなければいけない草がある。中でも厄介なのはバオバブの種だ。気づくのがおそすぎたら星が荒れ、手の施しようがない中根が星に穴を開ける。小さい星でバオバブが増えすぎたら星は割れてしまうのだ。

— まいにち、やればいいんだ。

後になって王子が言った。

— 朝、顔をあらったら、ていねいに草を見る。小さいうちはバラとそっくりだから、きちんとたしかめてからぬく。毎日ちゃんと気をつける。めんどうだけど、かんたんなことなんだ。

きちんとした絵をかくように、王子から言われたこともある。ちゃん子供にも覚えられる絵にするようにと。

— 旅にでるなら、あとまわしにしてもいい仕事もあるよ。だけどバオバブは大変なことになるんだ。なまけものの星でバオバブが三本はえてるのに、ほったらかしにしたことがあった。

王子の話をもとにこれをかいた。説教する気持ちは毛頭ない。けれどバオバブの危険を知らない人が多すぎる。小さい星ではてしない作業におわれる人の苦労がわかるだろうか。性に合わない

いが声を大にしてここで言う。

「子どもたちよ、バオバブには気をつけろ」

目に見えない危機を知らせるためにこの絵をかいた。苦労をする価値のある主張だ。この本でどうしてこの絵だけこんなに大きいのか、不思議に思う人がいるかもしれない。答えは簡単。かきたくてもかけない。それでも、危機感にかられてこそかけた絵なのだ。

## 夕日

---

王子の悲しい人生がわかってきた。夕日が沈むのを見るのが趣味になるまでに、たいして時間はかからなかっただろう。四日目の朝くわしく聞いた。

- 夕日がしずむのを見に行こうよ。
- でも待たないと。
- 何を？
- 夕日が沈むのをだろ。

王子はとてもおどろいて、そしてそのまま笑いだした。

- ボクの星にいる気でいたんだ。

だれでも知るようにアメリカが正午ならフランスでは日が沈む。日の入りを見たければ一分でフランスに行けばいい。でも実際には遠すぎる。けれど何歩か歩いてそこに椅子を置けばすむ惑星もある。小さい惑星なら見たいだけいくらでも夕日が見られる。

- 一日に四十三回見たことがあるよ。

王子はすこし間を置いた。

- わかるよね。ほんとうに悲しい時は夕日が見たくなるんだ。
- 四十三回見た日は、どんなに悲しかったんだい。

答えはかえってこなかった

## ヒツジと花

---

五日目、これもヒツジのおかげだった。王子はとうとつに聞いてくる。それでも王子にとっては長い間考えた末にうまれてきた問いなのだ。

— ヒツジって低木を食べるんだったら花も食べるの？

— 目の前にあるものはなんでも食べるさ。

— 花にトゲがあっても？

— ああ。花にトゲがあってもね。

— ジャトゲはなんのためにあるの？

そんなことは知らない。わたしはボルトをゆるめようとして一生懸命だったのだ。モーターにきつく固定されている。

この故障が命とりにおもえてきて、心配でいてもたってもいられなくなっていた。飲水がなくなったら、もうただごとではすまない。

王子はこっちの質問にはひとつも答えなくせに、聞いたことは答えさせる。ボルトでいらついていたわたしは思わず口走っていた。

— トゲなんてなんの役にもたたないよ。花が嫌がらせに生やしているだけだ。

— え。

しばらく沈黙がつづいたあと、王子が真っ赤な顔をしてまくしたてた。

— そんなのウソだ。花はよわいんだ。ひよわだから自分の身をもるためにも他になんにもできないんだ。だからトゲをはやしてるんだ。

わたしは答える気もなかった。ボルトが回らなかつたら金槌でぶったたいいてやる、それしか頭にないわたしに王子はまだ言いつづけた。

— そしたら花は。

— 花はじゃない。花も何もない。いちいち言わないでくれ。こっちは真剣なんだよ。

王子はとても驚いた顔をした。

— 真剣。

油まみれの指で金槌を構え、格好の悪いモノと戦うわたしを王子はにらみつけた。

— 大人みたいなこと言うんだ。

わたしは少し恥ずかしくなった。けれども王子はとまらない。

— なんでもごちゃまぜにして。

容赦ない言葉だ。王子は心底苛立っている。激しく頭をゆすぶって金の髪をゆらす。

— まっかな服を着た人がいた星があった。花の匂いもかがなかつたし星も見ない。誰かを好きになったこともない。足し算しかしないんだ。一日中“真剣なんだ、真剣にやっているんだ”自分が一番偉いと思って、あんなのは人間じゃない。あれはキノコだ。

— え？

— キノコだよ。

王子は怒りのあまり真っ青になっていた。

— 花が何千年もかけてトゲを身につけた。それでもヒツジが食べてしまう。花がどんな思いをしてトゲをはやしたと思うの？ それがムダだって本気で言ってるの？ ヒツジと花のたたかいはどうでもいいなの？ ふとった赤い伯父さんの計算よりも大切に、大事なことじゃないの。もし世界にひとつしかない花で、他のどこにもない花なのに、小さなヒツジが人うちで食べてしまう。朝起きて、そして、ヒツジがなんにも考えずに食べちゃって、それが、そんな、どうでもいいことなの。

王子は真っ赤になって肩で息をする。

— もしも大好きな花があって、何億もある星の中でひとつの星にしかなくて、星空を見上げたときに、自分の花がああ星の中のどこかにあると思うだけで温かい気持ちになれるのに、それをヒツジが食べてしまうってことは、星がいきなりぜんぶ消えるのと同じで、それはどうでもいいことなの。

王子はそれ以上言葉を発しなかった。泣きじゃくって日が暮れた。わたしは工具を置いた。金槌もボルトも、死も乾きも、どうでもいいと思えてきた。ひとつの星、惑星、この地球にいる王子をなくさめなければ。王子を抱き上げ、ゆっくりとあやして話しかけた。

— 口輪をかくよ。ヒツジにつけよう。それから花にはなにか自分の身が守れるものを。そうして、

言葉が見つからなかった。自分がどうしようもなく不器用に思えてきた。何をしたいのか、どこから手をつければいいのか。本当にわからない。涙というものは。

王子の花のことを聞くのに時間はかからなかった。王子の星で花びらがひとえしかない花はよく咲いた。人知れずひっそり咲く。草の中である朝ひっそりと咲いて、夕方にはしぼむ。けれどある日、どこから来たのか突然芽を出した。見たこともない細い枝に王子は注意した。新種のバオバブかもしれない。けれど低木は早々に伸びるのをやめて花を咲かせる準備にはいった。つぼみが膨らむのを見ていると、奇跡が起ころうとしていることがわかった。花は緑に包まれて着飾っただけではなかった。色にも気を配り、ゆっくりと支度をととのえて花びらを一枚一枚増やしていく。ケシの花のようにしわみれの姿は見せたくない。生まれた時から美しい姿で痛かった。どんなきれいな花になるのか。謎に包まれた身づくりが幾日も続き、そしてある朝日が登るまさにその時に花はその姿を現したのだ。すみずみまで念を入れた衣装をまとい、あくびをしながら言葉を発した。

— 今起きたばかりなのよ。寝起きで失礼しますね。

王子はおもわず賞賛の声を上げた。

— なんてきれいなんだ。

— そうですね。それに太陽とともに生まれたのよ。

花はおっとりと答えた。

謙遜をしらない花だとは思ったけれど、それにしても感動的な姿だった。

— 今は朝食の時間ね。用意してもらえるかしら。

王子は考えるよりさきにじょうろに新鮮な水を汲んで花にやった。花がうぬぼれて気難しい姿をあらわすのにたいした時間はかからなかった。たとえば茎にはえている四本のトゲについて話したことがあった。

— トラたちが爪をふりたててきても大丈夫よ。

— この星にトラはいないよ。

王子は言葉を返し、それに虎は草を食べないしと言いたした。

— 私は草じゃないのよ。

花はおだやかに答えた。

— ごめんなさい。

— トラの心配はしていないの。けれど風よけを持っていらっしやる。冷たい風は植物にとってたいへんなの。

風が？ それは大変だね。難しい花だ。

— 夜はガラスケースをかけてくださる？ ここは寒いわ。ここに来るんじゃなかった。

けれど花はそこで言葉を止めた。前は種だったのだ。ほかの場所など知りようがない。みえすいた嘘をついたことが恥ずかしかったのか、二、三度ごまかしの咳をした。

— 風よけは？

— 持ってくる。でも、教えてくれる？

花はことを蒸し返さないようにまた咳きこんだ。

王子は花のために何でもしてあげたいと心から思いはした。けれどほどなく疑問がわいてきた。考えることなく言葉をそのまま受け取るだけで、嫌な気持ちになったのだ。

— 聞くべきじゃなかったんだ。

ある時わたしに打ち明けた。

— 花の言うことは聞くべきじゃなかった。ながめて、においをかぐだけでよかったんだ。あの花は星をいいにおいで満たしてくれた。でも、それを喜ぶことはできなかった。爪でかかってくる話、あれに本当に驚いてしまって。ほんとうはほっておくべきだったんだ。

少し間を置いて言った。

— なにもわかっていなかったんだ。態度できめて、言葉に惑わされるべきじゃなかったんだ。花はいい香りで気持ちを明るくしてくれた。逃げ出すべきじゃなかったんだ。くらだらないことを口走るけど、その裏にある弱さに気がつくべきだった。花は、反対のことを言うものなんだ。花を好きになるのに、ボクは若すぎた。



## 旅立ち

---

出て行く前に、野鳥が飛び立つ前のように、星をきれいにしていた。朝、活火山のすすを丁寧に払う。まだ火がある火山がふたつあって、朝食を準備するのに使っていた。火の消えた休火山もひとつあって、これも中を掃除しておいた。なにがあるかわからないから。すすがつまっていない火山はゆっくり燃えて噴火はしない。煙突掃除と同じこと。もちろん地球の山は大きすぎるからそうも簡単にはいかない。

すこしゆううつなままバオバブの芽を抜いた。もう生えませんように。作業のひとつひとつにいつもより念を入れる。さいごに花に水をやって、ケースをかぶせる時には泣きそうだった。

— さようなら。

王子が言ったが花は答えない。

— さようなら。

もう一度言った。

花が咳をする。けれどカゼをひいたわけではなかった。

— 私がばかだったの。

やっと花が話した。

— ごめんなさい。幸せだった、

花が怒っていないことに王子はおどろいた。ガラスケースを持ったまましばらく動けなかった。こんなおだやかな優しさをこの花はもっていたのか。

— そう。私はあなたが好きだった。私が悪かったの。あなたは何もきがつかなかったのね。それはそれで仕方ないわよね。あなたも私と同じくらいばかだったんだから。あなたも幸せになってね。ケースはもういいわ。いらないから。

— でも、風が。

— 風なんてどうでもいいの。夜の冷気は気持ちがいいの。私は花なんだから。

— でもケムシも。

— チョウに会うためならケムシの二、三匹くらいがまんできる。きれいなものだというわ。それより時々会いにきてくれり？ 遠くへ行ってしまうんでしょう。ケダモノのことは心配しないで。私にはトゲが四本あるんだから。

バラが見せたトゲは弱々しかった。

— ぐずぐずしないで。いらいらするわね。出て行くって決めたんでしょう。行きなさいよ。

花は涙を見られたくなかったんだ。花はほんとうに気位が高い。

惑星325号、326号、327号、328号、329号、330号あたりにやってきた。人がいるか見てまわりながら、星のことが知りたかった。

最初の惑星には王様が住んでいた。ぬけるように白いのオコジョの毛皮をまとっていた。飾りけのない王座は見るからに気品に満ちていた。

— おお、議題がやってきた。

王子の姿に王は声を大にした。

会ったこともないのにどうしてそういうことを言うのだろう。

王子は心のなかでつぶやいた。

王にとって世界はとてもわかりやすいものだった。人は誰もがも議題をかかえている。

王子にとってそんなこと、知る由もなかった。

— もっと近こう寄れ。

相手がいて、はじめて王様になれる。王は人が来るのが好きだった。

王子はすわりたくて目で場所を探したけれど、星はすみずみまで見事な白いマントでおおわれていて、立っているしかなかった。疲れていたのであくびがでた。

— 王のもとであくびをするなど礼儀に反する。あくびは禁止であるぞ。

— でちゃったんだよ。

わけがわからないまま王子は言った。遠くから来て、疲れてしまって。

— よし、そういう理由ならあくびをしなさい。あくびをする人を見るのは何年ぶりだろう。あくびは興味深いものである。あくびをせよ。命令じゃ。

— びっくりして、もうでないんだ。

王の前で顔がほてってきた。

— な、何を言う。ワシ、朕があくびをせよと言っておるのではないか。は、早くしろ。

気分をわるくして王様は言葉に詰まりながら言いたてた。

王というのはいつの時代も敬われて当然なものだ。けれどこの王様はとてもいい王様だったので、道理が通ったことをすらすらと言いたてた。

— 朕が海鳥になるよう命じ、民が従わなかった場合、それは民の過ちではない。朕の落ち度であるのだ。

— 座っていいですか？

おそるおそる王子がたずねた。

— 朕が我に坐すよう命じる。

王は堂々とした態度でマントの裾をたくしあげた。

マントの下から姿を表した星が、あまりにも小さかったので王子は驚いてしまった。

こんな小さな星で、王様はなにを治めているのだろう。

— 閣下、おそれいりますが、質問していいですか？

— 朕がおまえに質問をするよう命じる。

— あなたの治めているものは何なのですか。

— すべてじゃ。

王様はいともたやすく答えた。

— すべて？

王は鷹揚な態度で足元を指さし、そのまま周りの惑星や星たちを指ししめしていった。

— 全部？

— 全部じゃよ。

絶対君主なだけではない。万物の帝でもあるわけだ。

— 星も貴方の持ち物なのですか？

— 当然じゃ。星は朕の命（めい）に従う。規律に反するものは容赦しない。

なんて素敵な特権なんだ。この王様となら、椅子を動かさなくても44回、いや、70回、いやいや百回でも2百回で夕日が沈むのが見ていられる。自分の星から離れて悲しい気持ちになってきていた王子は思い切って王様の力に頼ることにした。

— 閣下、日が沈むのが見たのです。ボクの願いを叶えていただけますか？ お日様に、沈むように命じて下さい。

— 朕が花に蝶のごとく舞えと命じたら、もしくは波瀾万丈の物語を描くように命じたら、もしくは海鳥となるよう命じ、それが執行されないとしたら、悪いのは朕か、花か。

— 王様です。王子ははっきり言った。

— その通り。命じる内容はできることでなければならん。

各自が実行可能なことを命じる必要がある。権威は根拠の上に成り立っておる。もしも手前が民に海に身を投げるよう命じたとしよう。革命が起きるだろう。朕は理にかなった命（めい）を発しねばらなぬ。

— で、ボクの夕日は？

王子は一度した質問は忘れない。

— 夕日を見ることはできよう。朕が命じる。しかし政府の識者が条件を整えるのを待つ必要がある。

— いつまでです？

王子は知りたかった。

王は大きなカレンダーに目を通した。

— ふむふむ。本日の夕刻、七時五十分前後であるぞ。朕が依頼に応えたことを我はその目で確認するだろう。

あくびがでた。夕日が見られない場所に来てしまったて後悔したし、それにだんだん飽きてきた。

— もうやることないし、行くね。

— 出て行ってはならん。

議題の提示に王様は喜んだ。

— 出て行くことを禁ずる。我を大臣に任命する。

- 何の大臣？
- 大臣は、うむ、法務大臣だ。
- さばく相手もないのに？
- いるかおらんかはわからんだろう。朕はまだ我が王国中を見て回ってはおらん。年を取り過ぎて馬車には乗れん。歩くのは大儀でな。
- でもボクはもう見たし。

王子は惑星の裏側にちらりと目を走らせた。誰もいない。

- なら我が我を裁けばよい、なによりも高度な裁きではないか。他人を裁くより自分を裁くほうが難しいのだ。それができるようになれば我は真の賢者となろう。
- 自分をさばくんだったらどこでもできるよ。ここに住まなくてもできるし。
- ふむふむ。朕の星には古参の大ネズミがおる。夜に物音がする。あの大ネズミを裁け。時には死刑にしてもよいぞ。あやつらの命は我の裁きにかかっておるのだ。が恩赦も必要じゃよ。種（しゅ）を保たんといかんからな。一匹しかおらんのじゃ。
- 死刑なんてしたくはないよ。もう、行くね。

— 否

- それでも王子は出る身支度を整えた。これ以上老いた王とつきあっていくはなかった。
- いうことを聞いてもらいたいんだったら、筋のおっためいれいをしたほうがいいと思うな。たとえば、一分以内に出ていくように、とか。そういうのならうれしいんだけど。

王はなにも答えなかった。王子はすこし迷ったけれど、息をついて背中を向けた。王があわててさげんだ。

- 我を外交官に命ずる。  
声に権威があふれていた。

大人って変。旅をしながら王子は思った。

## 見栄張り

---

ふたつ目の星には見栄張りが住んでいた。

ー おおおお来た来た、わたしの取り巻きがやってきた。

遠くから見栄張りが大声で呼びかけた。

見栄張りにとって、他の人間は誰もが見栄張りを褒めたたえるために存在するのだ。

ー こんにちは。おもしろい帽子ですね。

ー わたしに喝采をおくる者に、あいさつをしてやるためだ。そういう輩はここには来んがね。

ー そうなんですか？

話がよくわからなかった。

ー 手を叩いて、人に拍手をすることだよ。

王子は言われたとおりにやってみた。

見栄張りは帽子をかるく持ちあげて、礼儀ただしくあいさつをした。

## 酒呑み

---

大酒呑みの星があった。

ほんの少ししかその星にはいなかったけれど、悲しみがいつまでも後をひいた。

— 何をしているの？

空っぽの瓶をずらりと前に並べ、酒呑みがひとり座っていた。

— 呑んでるんだよ。

— どうして飲むの？

— 忘れるためにな。

— 何を忘れたいの？

王子はかわいそうになって聞いてみた。

— 恥だよ。

— 何が恥ずかしいの？

手を貸してあげたくて理由を聞いた。

— 呑んでいることさ。

酒呑みはそれから口をつぐんだ。

王子は困ってその場を去った。

大人ってほんとうにとってもとっても変。

旅をしながらつくづく思った

四つ目の星にいたのは実業家だった。王子が来ても顔ひとつあげない。

— こんにちは。タバコが消えてますよ。

三足す二 五、五足す七 一二、一二足す二 一五にちは、一五足す七 二十二、二十二足す六 二十八、つける時間なんかない、二十六足す五 三十一、しめて五億百六十二万二千七百三十一と。

— 何が五億？

— おお、まだおったのか。五億百、何だったか。まったく仕事が多すぎて。真剣なんだぞ。私語をするひまなんかありません。二足す五は七、

— 五億百万の何なの？

王子は一度質問をすると答えがあるまではなれない。

実業家が顔をあげた。

— この星にきて五十四年になるが、邪魔をされたことが三回あった。最初は二十二年前。隕石が落ちてきよった。まったくどこから来たんだか。総毛立つ音が響いてな。四力所足しまちがえてしもうたよ。二度目は十一年前。リュウマチの発作だった。運動不足でな。切り上げる時間がなくて。真剣にやっておるんじゃ。それで今回が三度目というわけで、五億百、

— 何が五億百なの？

答えて黙らせるしかないとも思ったのだろうか、実業家が言った。

— 空にゴマンとある小さいものじゃ。

— ハエ？

— そんなわけあるか。輝いている小さい、

— ミツバチ？

— 違う。怠け者たちが讚えよるきらびやかな小さい物体じゃよ。

— 星のこと？

— そうそう、星じゃ。

— 五億百の星をどうするの？

— 五億百六十二万二千七百三十一の星じゃ。真面目なんだぞ。正確に言わないと。

— で、星で何をするの？

— その星でワシが何をするのか聞いておるのか？

— そう。

— 何もせん。所有するだけじゃ。

— 星を自分の持ち物にするの？

— その通りじゃ。

— でも、ボク、星はもう王様が、

— 王は所有せん。君臨するだけじゃ。まったくもって別の話じゃよ。

— 星を持ってどうするの？

— 金持ちになれるじゃろ。

— お金持ちになってどうするの？

— 他の星を買うんじゃ。他の誰かが発見した星をな。

ちょっと酒呑みに似てる。思いつつ他の質問がうかんだ。

— どうやったら星の持ち主になれるの？

— 星が誰のためにあるというんじゃ？

実業家は気分を害したように聞きかえした。

— 知らない。誰のものでもないよ。

— その通り。君が誰のものでもないダイヤモンドを見つけたらそれは君のものだ。一番はじめに思いついたら特許がとれる。思いつきは君のものだ。星を所有するなど他の誰が思いついた？

だから星は私のものなのだ。

— それもそうか。それで、星でどうするの？

— 管理するのだ。数えて、数えなおす。大変な作業じゃよ。真剣に取りくまねばな。

聞いていて、どこか納得のいかないところがあった。

— もしボクがマフラーを持っていたら首に巻いて歩くよ。もしボクが花を持っていたらつんで持てる。でも星はとれないよ。

— 銀行に預ければいいのじゃ。

— どういうことなの。

— 所有する星の数を書きつけて、銀行の引きだしに入れて鍵をかけるんじゃよ。

— で？

— それでいいのじゃ。

— 面白いね。詩みたいだ。

《面白いし、わかりやすいやり方だとは思うけれど、なんだか真剣っていうのとは違うんじゃないかな》

大人の考える真剣っていうのは、ボクの真剣とはぜんぜん違う。

— ボクだったら、花を持っていたら毎日水をやる。ボクは火山を三つ持っていて、週に一回すすを払ってあげる。死火山もね。ほんとうに消えてるかどうかは誰にもわからないでしょう。火山も、花も、使うから持ってるんだ。でも星は使えない。

実業家は口を開け、何か言おうとしたけれど、言うべき言葉が見つからなかった。

大人ってほんとうに、ぜんぜんちがう。旅の間中、王子はずっと考えた。



## 街灯守り

---

五つ目の惑星はとても興味深い星だった。

今まで見た中で一番小さくて、街灯がひとつ、街灯をつける街灯守りひとりでもういっぱいになってしまうほどだった。宇宙の果ての、家も住人もいない星で、街灯と街灯守りがどうして必要なのか、王子にはさっぱりわからなかった。もしかしたら知恵が足りない人だったのかもしれない。王様より見栄張りよりもばかで、実業家や大酒飲みよりもぬけていたのかもしれない。けれど少なくともやっていることに意味はあった。街灯をともすのは星がひとつ生まれたり、花が開いたりするときで、火を消すのは花や星が眠る時。とても素敵な仕事じゃないか。本当に役にたつ。だってきれいなんだもの。

星に降りた時、街灯守りに賞賛の目を向けながらあいさつをした。

- こんにちは。どうして街灯を消したの？
  - そういう規則になってるからね。おはよう。
  - 規則って何？
  - 街灯を消すことだよ。こんばんは。
- そう言いながら点灯夫は街灯をともした。
- どうしてまたつけたの？
  - そういう規則になっているんだ。
  - なんだか、よくわからないや。
  - わかる必要なんてない。規則は規則だ。おはよう。

街灯守りはまた街灯を消した。

それから赤いハンカチで額を拭くと

- 大変な仕事だよ。昔はまともだったんだ。朝消して夜ともす。後の時間はゆっくりできた。夜は夜で眠れたし。
- 規則が変わったの？
- 規則は変わっちゃいない。大変なことが起こったんだ。惑星の回転がどんどん早くなって、でも規則は変わりしなかった。
- それで？
- 分刻みで廻るんだ。息つく隙もなくなった。一分ごとにつけては消す。
- すごい。この星では一日が一分で過ぎていくんだ。
- すごくはない。話を初めてもう一ヶ月経つんだぞ、
- イッカゲツ？
- ああ、三十分。三十日だ。こんにちは。

街灯守りはまた街灯をつけた。

その姿を見ながら、きまりをきちんと守る街灯守りはすごいと思った。ボクだって夕日が沈むのを見に行った。椅子を用意して。この人を助けてあげたい。

— 休みたい時休める方法があるよ。

— わたしはそれが知りたかったんだよ。

きちんとやりたい時があれば、手を抜きたくなることもある。

— この星はちいさくて、大股で三歩も歩けば一周できるでしょ。ゆっくり上手く歩けばいつもお日様の下にいられるよ。休みたくなったら休めばいいじゃない。一日は好きなだけ長くなる。

— それは名案とはいえないな。わたしは休みたいんだよ。

— それは大変だね。

— ああ、大変だ。おはよう。

そして街灯守りは街灯を消した。

— いろんなところへ行ったけれど、何よりも覚えているのはあの人のことだ。今までの誰よりも、王様や見栄張り、酒呑みや実業家よりもボクはきらいだ。でもばかじゃないよね。自分のことよりほかのことを大事にしているんだから。

王子は力のないため息をついた。

友だちになりたかった。でも星はほんとに小さくて、二人いられる場所はなかった。

王子は口にはしなかったが、本当の理由は、その星なら二十四時間で千四百四十回日の入りが見えたからだとわたしは思う。

六つ目の惑星は十倍大きい星だった。老人がひとり、大きな帳面に書付をしている。王子の姿をみとめると声をかけてきた。

— ほう、探検者よ。

王子は机の前に座って少し息をついた。長い長い旅だった。

— どこから来たのかね。

— その大きな本は何なの？ 何をしてるの？

— わたしは地理学者なのだ。

— 地理学者って？

— 海がどこにあるのか、川がどこにあるのか、町や山、砂漠のある場所を知っている人のことだよ。

— すごい。

やっとなんとした仕事をしている人がいた。王子はその星について書きつけた本に目を走らせた。こんなに堂々とした星は今まで見たことがない。

— きれいな星ですね。大きな海はありますか？

— そんなことは知らん。

— えっと、

少しがっかりしたけれど王子は続けた。

— 山は？

— わかりようがない。

— 町や川や、砂漠なんかは？

— それもわたしにはわからん。

— でも、地理学者なんですよ。

— もちろんだ。地理学者は探検家とは違うのだぞ。探検家が決定的に不足している。町を数えるのは地理学者の仕事ではない。川も山も海も大海も砂漠も調査したりしない。歩きまわるには重要過ぎる役割なのだ。机を離れる訳にはいかんだろう。そのかわり探検者を受けいれ、質問をして探検者の見たものを書きつけるのじゃ。探検家で、これはという話をするものがいたらまずはその者の人間性を見る。

— どうしてなの。

— 探検談が作りごとだった場合は、その被害が何冊もの本におよぶことになる。それに探検家というものは、たいがい底なしの酒呑みなんだ。

— どうしてなの。

— 酔うと物がふたつに見えるからな。ひとつしかない山をこちらはふたつあると書くはめになる。

— うそつきな探検家になれそうな人、ボク知ってるよ。

— ありえることだ。というわけで、その探検家が品行方正であるとわかった時点で発見につい

ての調査を行う。

— 見に行くの？

— いや、一筋縄にできることではないのだ。だが、探検者に証拠の品を持ってこさせる。たとえば、大きな山を発見したものがいたとする。その場合、岩の提示を求めるのだ。

不意に地理学者が目の色を変えた。

— 君は遠くから来たんだろう。君の探検した惑星について話しておくれ。

地理学者はページをめくり、えんぴつをけずりはじめた。探検家の話をまずはえんぴつで書きとめる。それから証拠の品が出された時点でインクで清書をするのである。

— で、

地理学者が話をうながした。

— えっと、ボクのところはそんなにおもしろいところでもないよ。小さい火山がみっつあって、ふたつは中で火が燃えてる火山で、もうひとつは火が消えてしまった火山なんだ。でもほんとうに消えてしまったかどうかは、だれにもわからないけどね。

— 誰にもわからんな。

— それから花が一輪ある。

— 花はいらない。

— どうして？ きれいだよ。

— 花は短命だからだよ。

— タンメイってなに？

— 地理というのは、文献の中でも一番貴重な存在なのだ。時がたっても書かれていることはけっして色褪せない。山はめったに移動しないからな。大海が干上がることも稀である。地理学者というものは、永遠を書き留める存在なのだ。

— でも、火山はまたかつどうするかもしれないよ。タンメイってなになの？

— 火山が死火山だろうが活火山だろうが、地理学者にとっては同じことなのだ。大切なことはそれが山であること。これは永遠に変わりはない。

— で、タンメイってなんなの？

王子は一度質問をはじめると、答えがわかるまで投げださない。

— のちに消えてなくなる危機にあるものだ。

— 花は消えてなくなるの？

— 当然だ。

《ボクの花はタンメイなんだ。食べられないように自分の身を守れるものが、四本のトゲしかない。その花を、ボクは置きざりにしてきた》

王子ははじめて後悔した。けれどもなんとか勇気をふりしぼった。

— どこかい星を知っていたら、教えてもらえますか？

— 地球かな。あそこは定評がある。

王子は花のことを考えながら、その惑星をあとにした。



## 地球

---

七つ目の惑星が地球だった。

今までのどの星ともちがっていた。百十人の王様がいて、その中にはもちろん黒い肌の王様もいた（三人）、地理学者が七千人、実業家九十万人、酒呑み七百五十万、三億千百万の見栄張りがいた。ほぼ二十億の大人がいたということだ。

地球の大きさはというと、電気が発明される前までは六大陸全体で十六万二千五百十人の街灯守りがいた、これでわかってもらえるだろうか。

遠くはなれたところから見ると、すばらしい姿が見えただろう。街灯守りたちの流れはまるで劇場のバレエのような華麗さだった。まずはニュージーランド、オーストラリアの街灯守りたちが登場する。ランプに火をともして眠りにつく。そこから中国、シベリアの街灯守りの登場となり、やがてこの一団も舞台の袖に退場する。そこからはロシア、インドの街灯守りの出番だ。ひきつづきアフリカ、ヨーロッパへと進み、南アメリカ、北アメリカへと移動していく。誰ひとりとして出番を間違えない。壮大な舞踏だ。

ただ、北極都南極の街灯守りだけがたいくつそうに歩きまわっている。出番が年に二回しかないのだから。

思いつきにはうそがまざる。守り人の話はおおげさだ。この惑星を知らないものに誤解を招きかねない。もしも地球上の二十億の人が集まってすこし詰め気味で立つとする。二万キロメートル四郷の場所に落ち着いて暮らすことができるだろう。大西洋の小島より狭い場所に人をつめこむようなものだ。

もちろん大人はそうは思わない。大人は広い空間をほしがる。バオバブのように自分を重要な存在だと思っているからだ。大人は数字が大好きだ。計算をさせたらきっと笑顔になる。でも計算に時間をとられてはいけない。実にくだらない作業なのだ。ほんとうは。

王子は地球に来たとき人が見あたらなかったのでおどろいた。惑星を間違えたのかもしれないと不安になった。月の光が砂漠の砂を照らしていた。

— こんばんは。

誰にともなく呼びかけてみた。

— こんばんは。

へびがこたえた。

— ここはどこ星なの？

— 地球だよ。アフリカだ。

— 地球には人はいないの？

— ここは砂漠さ。砂漠に人がいるわけないだろう。地球は広いんだ。

王子は岩の上に座りこんで空を見上げた。

— 星が光るのは、見つけてほしいからかな。あれがボクの星だよ。ちょうどこの上にある。なんて遠いんだらう。

— きれいな星だね。ここに何しに来たんだい。

— 花と、うまくやっていけなかったんだ。

— ああ、

声を上げるとへびは黙ってしまった。

— 人はどこにいるの？

王子はやっと言葉を継いだ。

— 砂漠はちょっと寂しすぎる。

— 人間のいるところも寂しいもんだよ。

へびが言った。王子はその姿をしばらく見つめて、

— 君って細いな動物だね。指みたいだ。

— 王様の指よりも力はあるさ。

王子はちょっと笑った。

— たいした力じゃないよね。足もない。遠くに旅もできないね。

— 船より遠くに行けるんだぞ。

へびは王子の足首に体を巻きつけた。金のアンクレットのようだった。

— 私に触れるものは、生まれたこの地に還るだろう。だがお前は純粹すぎる。それによその星から来たんだらう。

王子は返事をしなかった。

— かわいそうに。この花崗岩の惑星に降り立つには、貧弱なやつだ。自分の星が恋しくなったら、助けてやろう。

— うん、わかった。でも、どうしてそんな、なぜなぞみたいなことばかり言うの？

— すべてお見通しだからさ。

それ以上話すことはなかった。



## 一輪の花

---

王子は砂漠を歩いていると、一輪の花に出会った。花びら三枚の、これといってきれいだとは思えなかった。

— こんにちは。

王子が言った。

— こんにちは。

花が答えた。

— 人はどこにいるかご存じですか？

礼儀ただしくたずねると、花は以前隊商（キャラバン）を通るのを見たことがあったので、

— 六、七人はいるでしょうね。何年も昔に一度見ましたわ。でもどこにいるかは知りません。風が連れていってしまうのです。根がないもので、人間て大変ですよ。

— さようなら

王子は言った。

— さようなら。

花は答えた。

# 山

---

王子は高い山にも昇った。

王子の知っている山といえば、膝の高さまでしかない火山がみっただけだった。高い山からなら、大地も人も見渡せると思った。けれども、どこを見てもとがった岩ばかりがひろがっていた。。

ー こんにちは。

王子は呼びかけてみた。

ー こんにちは、こんにちは、こんにちは

こだまがかえってきた。

ー どこにいるの？

ー どこにいるの どこにいるの どこにいるの

ー あなたはだあれ？

ー あなたはだあれ あなたはだあれ あなたはだあれ

ー ボクの友だちになってよ。ボクはひとりぼっちなんだ。

ー ボクはひとりぼっちなんだ、ボクはひとり、ボクはひとり。

なんて星なんだ。かわいて、とんがって、ざらざらで。この人にはソウゾウリョクがない。言われたことをくりかえすだけ。ボクの花はいつも自分からはなしていた。

## ある庭にて

---

それでも砂漠を越え、岩を渡り、雪を踏みしめ、遠くへ歩くうちにやっと人の住んでいるところへたどりついた。

— こんにちは。

その庭には、バラがひしめき咲きほこっていた。

— こんにちは。

バラたちがこたえる。

王子は目をこらした。王子のバラそっくりの花がならんでいる。おどろいてたずねた。

— 君たちはだれ？

みながこたえた。

— バラよ。

— ああ。

力が抜けてしまった。王子のバラは宇宙にたったひとつしかない花だと言っていた。目の前には、同じバラが見渡すかぎり咲きみだれていえる。

「あれを見たらボクのバラは、きつときをわるくしただろうね。何度もセキをしたり死にそうなるふりをしたりして、見えすいたことをして。ボクはそれをしんぱいしてあげるふりをするしかなかった。そうしなきゃあのバラは、ボクのためにほんとうにかれてみせただろうね」

王子は一度言葉を切った。そして

「一輪だけの花だったからボクもすごいものをもっているとおもえたんだ。でもそれが、どこでもあるバラで。それと、ひざの高さまでしかない火山がみっつ。その中の一つはもうふん火することもないかもしれない火山で。ボクは自分がたいした王子じゃないような気がして」

そして王子は草の上につつぶして、泣いた。

## キツネ

---

キツネが来たのはその時だった。

— こんにちは。

— こんにちは。

王子は礼儀ただしく返事をしてふりむいたけれど、だれもいなかった。

— ここだよ。

りんごの木の下のほうから声がする。

— あなたはだれなの、きれいな毛、

— ぼくはキツネだよ。

— あそぼうよ、ボクかなしいんだ。

— あそばないよ。順応してないから。

— ご、ごめんなさい。

ついあやまって、それから聞いた。

— ジュンオウってなに？

— キミはここの人じゃないね。どこから来たんだい。

— 人間を探しているの。ジュンオウってなに？

— 人間は猟銃をもっていて狩りをする。まったく困ったやつらだよ。ニワトリなんかもかうんだ。そんなことしか考えてない。ニワトリがほしいのかい？

— ううん、友だちをさがしてるんだ。ジュンオウってなに？

— もうとっくのむかしに忘れられたことだけど、つながりをもつ、ってことだよ。

— つながりをもつ？

— ぼくにとって今のキミはそのへんにゴマンという男の子となんのかわりもない。ぼくは君がいなくてもいいし、君にとってもぼくはそのへんにゴマンというキツネと何のかわりものない。でも順応していけば、君はぼくにとってこの世でたったひとりの男の子になるし、ぼくは君にとってこの世でたった一人のキツネになる。

— わかってきたみたいなのがする。ボクの花は、ボクにジュンオウさせたんだ。

— ありそうだね。地球にはいろんなことがおこるもんだ。

— 地球じゃないんだけど。

キツネはこの一言が気になったみたいだった。

— 他の星？

— うん。

— その星には猟師はいるのかい？

— いないよ。

— それはいい。ニワトリは？

— いない。

— かんぺきな場所ってのはなかなかないものだな。

ため息をついて、また地球のはなしにもどった。

— つまらない生活だよ。ぼくはニワトリを追って猟師はぼくを追う。どのニワトリだって似たようなものだ。人間だってそう。だからたいくつしてきてね。君がぼくを順応してくれれば毎日がたのしくなりそうだ。他の人間とはちがう足音が聞こえるように鳴る。ふつうの足音なら地面の下にかくれる。君の足音だったら地下から出てくる。音楽みたいなものだよ。

それにほら、あの麦畑。ぼくはパンなんか食べない。麦なんてぼくにとっては何の役にも立たない。でも君のかみは金色だ。順応していけば、それはとっても大事な色になる。金色の麦を見たらぼくは君のことを思いだす。風が麦をわたる音が、ぼくは大好きになる。

キツネはそこまで話すと王子をじっと見つめた。しばらくしてから言った。

— お願いだ。ぼくを順応しておくれ。

— それはいいけど、ボクにはあんまり時間がないんだ。ボクは友だちを見つけたいんだ。いろんなことが知りたいし。

— 人間は順応させることしか知らない。学ぶ時間がない。人間はできあがったものを店で買う。でも店に友だちは

売ってない。友だちがほしいのなら、どうかぼくを順応させておくれ。

— どうやったらいいの？

— じっくり取り組まなきゃならない。まずはこんなふうに草の上で、少しはなれてすわる。ぼくは君を横目で見ると、君は何も話さずしゃべらない。言葉はまちがいのもとだ。でも毎日すこしずつ近くに座るようにするんだ。

次の日王子は同じ所にやってきた。

— 一定の時間に来たほうがいいな。たとえば夕方の四時に来るとする。そしたら三時にはぼくはワクワクしてくる。四時がちかづくにつれてドキドキして不安にもなる。しあわせがわかってくる。でも、時間が決まっていなければいつ心の準備をしていいのかわからないじゃないか。慣例が必要なんだ。

— カンレイって？

— これもとっくのむかしにわすれられたことだ。ふつうの日とは違う特別な日。ふだんの時間とは違う特別な時間。これがカンレイなんだ。たとえば猟師、あいつらは毎週木曜日、村の女の子とダンスをおどる。木曜日は特別な日で、ぼくはぶどう畑までさんぽができる。もしもダンスの日が決まっていなかったら、どの日もおんなじようなもので、ぼくにはゆっくりできる日がない。

王子もキツネにジュンオウしてきた。そして別れの時が近づく。

— ああ、ぼくは泣いてしまいそうだ。

— キミのせいだよ。かなしい気持ちはいやだけど、キミがボクにジュンオウしてほしい、って言ったんだ。

— そのとおり。

— でもキミは泣いてしまう。

— そのとおり。

— じゃ、いいことがないね。

— いいことなんだよ。麦の色のおかげだよ。

そしてキツネは言った。

— バラに会いに行きな。君のバラがこの世でたったひとつのバラだってわかるだろう。ぼくに別れを言いにもどってきてくれよな。だいじなことを教えてやるよ。

王子はバラ園を訪れた。

— キミたちはボクのバラとはちっとも似てないね。ぜんぜんちがう。だれもキミたちをジュンオウしないし、キミたちもだれともジュンオウしないし、ちょっと前のボクのキツネみたい。前はどこにでもいるキツネとおんなじだった。でもボクたちは友だちになって、今じゃボクにとってたったいっぴきのキツネなんだ。

バラたちはきまり悪そうだった。

— キミたちはきれいだ。でもからっぽで、ボクはきみたちにいのちをかけられない。そりゃボクのバラもキミたちみたいなふりができる。でもボクのバラはボクにとって一本しかないバラで、キミたちみんなよりもボクはボクのバラがいいんだ。だって水をやるのもボクだし、ガラスケースをかぶせてあげるのもボク。風よけをたててもあげるし、ケムシもとってあげる。(二、三びきはチョウにするためにおいておくけどね) グチもきいてあげるし、ジマンだってきくよ。だまっけていてもいいんだ。だってボクのバラなんだから。

それから王子はキツネのところにもどってきた。

— さようなら。

— さようなら。大事なことってというのは、とつてもかんたんなことなんだ。ものはこころで見なきゃいけない。ほんとうに大切なものは、目では見えないものなんだ。

— ほんとうにたいせつなものは、目では見えないものなんだ。

王子は忘れないように、くりかえした。

— つくした時間のぶんだけ、バラは大事なものになる。

— つくしたじかんのぶんだけ、バラはだいじなものになる。

王子は忘れないように、くりかえした。

— 人間は本当のことを忘れる。でもキミは忘れないように。順応したものの責任は一生とるべきなんだ。キミはバラへの責任をはたす。

— バラへのセキニンをはたす。

王子は忘れないようにくりかえした。

ー こんにちは

王子が言った。

ー こんにちは。

転轍手（てんてつしゅ）が言った。

ー 何してるの？

ー 乗客を振り回しているんだ。何千もの乗客が列車に乗って、それを右へ左へ走らせるんだ。窓から明かりをさんさんともらした夜行特急が雷のようにながらながら転轍手小屋を震わせ走っていった。

ー 急いでるね。何をとりにいくの？

ー 運転してる者にはどうでもいいことだ。

行った方向から夜行特急が来る。

ー もう帰ってきたの？

ー 別の急行だ。折りかえしてきたんだ。

ー 行った先が気に入らなかったの？

ー 気に入ったとか気に入らなかったとか、そういう問題じゃない。

その後からまた一台、夜行特急がうなりをあげて走ってきた。

ー さっきの人たちを追っかけてるの？

ー だれも追っちゃいやしないよ。

中の人が見えた。寝ている人、あくびをしている人。子どもたちだけが窓に鼻を押しつけて外を見ている。

ー 何を取りに行くのか、子供だけが知っているんだね。お気に入りの人形だけに時間をつかってる。人形はとっても大事で、大人に取り上げられると泣いてしまうんだ。

ー 子供はいいな。

## 薬売り

---

— こんにちは  
星の王子が言った。

— こんにちは  
物売りがこたえた。

喉がかわかない薬を売っていた。小さな丸いその薬を、週にひとつ飲むだけで、七日間水を飲まずに暮らしていける。

— どうしてそんなの売っているの？

— これで膨大な時間を節約できるんですよ。専門家の計算によると、週に五十三分の節約になるのです。

— その53分で何をするの？

— やりたいことができますよ。

— ボクだったら、53分あったら、ゆっくりあるいて水がわいているところに行くな。



## 井戸を求めて

---

飛行機が故障して八日がすぎた。薬売りの話を聞きながら、わたしは持っていた水の最後の一滴を飲み干した。

— 君の旅の話をもっと聞いてはいたいんだ。でも飛行機はまだ直っていないし、水がもうなくなった。湧き水までゆっくり歩いていけばいいんだけど。

— ボクのキツネが、

— キツネの話をしている場合じゃない！

— どうして？

— だって水がなければ君も死ぬんだぞ。

わかってはもらえなかった。

— 死んでも、友だちがいるのはいいことじゃない？ ボクはキツネと友だちになれてほんとうによかったよ。

この子は危険を理解できないんだ。飢えることもなければ乾きもない。太陽の光だけで満たされるんだ。

そう思っていると王子が返事をした。

— ボクものどがかわいた。井戸をさがしにいこう。

聞いただけで疲れてしまった。広大な砂漠で、あてもなく井戸を探すなんて正気の沙汰ではない。それでも結局歩きだした。

何時間もだまって歩いているうちに星がまたたきはじめた。乾きから微熱があがり、夢見心地でそれを見る。物思いの中王子の言葉がふわりと浮かんだ。

— 君も喉がかわくんだ

王子はそれにはこたえなかった。

— 水だってここにいいんだ。

よくわからなかったけれど、口には出さなかった。聞いても仕方ないことはわかりきっている。

疲れて王子は腰をおろす。私もその脇に座った。しばらく黙ったままだったけれどやがて王子が口を開いた。

— 星、きれい。見えない花のおかげだね。

もちろんさ、と私は答え、それから黙って月に照らされた広大な砂漠を見つめていた。

— さばくも、きれいだね。

それは本当のことだった。砂漠はいい。砂丘に座ると何も見えなくなる。何も聞こえなくなる。その沈黙の中でなにかが輝きたってくる。

— さばくがきれいなのは、井戸をかくしているからなんだよ。

謎が一瞬にしてとけた。子どものころ住んでいた古い家に、宝物が埋まっているという言い伝えがあった。もちろんだれも宝物を見つけた人はいなかったし、探そうとした人がいたかどうかもわからない。けれどもあの家の魅力はそこにあったのだ。奥底に秘密を隠しもっていた。

ー ああ。家だったり、星だったり、砂漠だったり。見えないものがあるからきれいなんだ。

ー うれしい。キツネのことわかってくれて。

寝入った王子を腕にかかえ、私はまた歩きだした。胸は感動に満ちていた。はかない宝ものを抱いているようだった。これ以上もろいものはこの世の中にはないだろう。月のひかりの下、目を閉じた王子。ひたいは青白く、巻き毛は風に揺れていた。「目に見えるものはただの外見で、本当に大切なものは、目に見えないものなのだ」

力なくちびるが笑いかけた。私はもう一度つぶやく。この眠っている小さな王子が、私をひきつけるのは、王子が花につくしている心のせいだ。一輪のバラを思う心はランプの炎のようで、眠っている時さえも光りかがやいている。このランプを守らなければ。ささやかな風でかき消えてそうなこのランプを。

歩いていくうちに夜が明けた。そして井戸が見えてきた。

— 人間ってさ、すぐにいっしょうけんめいになるくせに、何がほしいのがなにか、ほんとうはわかってないんだ。なにかにいつもおわれておんなじことばかりやってる。

王子はそう言って、少し間を置いてからつけたした。

— そんなことしなくていいのに。

その井戸は、砂漠ではみかけないような井戸だった。サハラの井戸はただ掘るだけのものなのだが、目の前にあったのは村にあるような井戸だった。けれど人家は見当たらない。夢の中にいるようだった。

— へんなの。ちゃんとそろってるね。滑車もつるべも、つなもある。

王子は笑ってつなを引き、滑車を回す。身動きひとつしなかった風見鶏がひさしぶりの風にゆすられるように、滑車はきしんだ音を立てた。

— ねえ、井戸が目をさました。うたいだしたよ。

はしゃぎすぎて倒れてしまわないか心配になる。

— やるよ。君にはおもすぎる。

桶を縁までゆっくりと引きあげた。滑車の音が耳につく。波打つ水面に太陽がゆれている。

— のみたいな、のませて。

王子がほしかった物がわたしにもやっとわかった。

桶を王子の口元によせる。王子は目を閉じたまま水を飲む。祝いの席のようだ。この水は、ただの飲料水とはわけがちがう。星の運行の元、滑車の歌とこのの腕で地上にたどりついた水。心をみたす恵みだ。小さかったころのこと、モミの木のあかり、真夜中のミサ、みんなのうれしそうな顔、開けられるのを待っているきらびやかな贈り物の数々。

— このひとたちは庭でバラをそだてて、でも、さがしものが見つからない。

— うん。

— さがしているのが、バラ一本と、すこしの水だったりして。

— そうだろうな。

— 目じゃなくて、こころでさがさないと。

わたしも喉をうるおした。深呼吸もする。砂も夜明けもはちみつの色をしている。この色で幸せに満たされる。どうしてこんなにも幸せになれるのだろうか。

— やくそくをまもってよ。

かたわらで腰をおろしている王子がふいに言った。

— どの約束だい。

— ヒツジの口輪。ボクには花をまもるせきにんがあるんだ。

わたしはポケットから今までかいた絵をだした。王子がわらった。

— このバオバブ、キャベツみたい。

— え？

わたしにとっては自信作だったのだ。王子は追い打ちをかける。

— このキツネの耳、ツノだよ。長すぎる。

— こっちの身にもなれよ。大ヘビの外側と内側かかいたことなかったんだぞ。

— あ。

王子はいまさらながらに思い出し、いいよと言ってくれた。

わたしは口輪をかいた。できた絵を抱きしめて、それから王子にゆだねた。

— 君は、ほんとは、やることあるんだろう。

王子はわたしの問には答えなかった。

— あしたで、地球に来て一年になるんだ。

わたしは王子が続けるのをひたすら待った。

— この近くに落ちたんだ。

王子の顔が赤くなった。

どういうわけか、また胸騒ぎにおそわれた。それと同時に疑問がわいた。

— じゃ、君とはじめてあった朝、この辺を歩いていたのは偶然じゃなかったんだ。ひとりで人のいるところから何千マイルもまた歩いて戻ってきたのか。

王子はまたもや顔を赤くする。聞きにくかったけれどやっぱり尋ねる。

— 一年目だったからかい。

顔がどんどん赤くなる。答えがない。けれどその顔ではそうだと言っているようなものだった。

— わたしは、こわいんだ。

王子が言った。

— しゅうりをつづけないと。キカイのところにもどってよ。ボクはここで待ってる。明日の夜にもどってきて。

わたしに確信はもてなかった。キツネのはなしを思いだす。順応してしまうと涙も出てくる。

井戸のそばに崩れかけた古い壁があった。次の日の夜、修理をおえて戻ってくると、王子は壁の上に座って足をぶらつかせていた。

— おぼえてないの？ ここじゃないよ。

— 覚えているさ。今日は今日だ。違う場所でもいいだろう。

すぐさま聞こえてきた声は、どう考えても王子への答えだ。

わたしは壁へ向かっていった。王子の他には誰もいない。声もしない。けれど王子は話しかける。

— それもそうだね。ボクがおりたところであおう。まっててね、よるにあるいていくから。

あと二十メートルというところまで来ても、相手の姿も形も見えない。

すこし間をあけて王子がまた言う。

— いいドクなの？ほんとにながくはくるしまない？

わたしは足を止めた。理由もわからず胸がしめつけられた。

— じゃあもう行ってよ。ボク、おりるから。

わたしは壁の下に視線を落とした。一本のひもが王子に向かって伸びている。三十秒で獲物をしとめる黄色いヘビだ。わたしはリボルバーをさがしてポケットをさぐった。足早に近づいたせいで気配に気がついたヘビがするすると砂の上を泳いでいった。軽い金属音を立て、噴水が消えるように、岩の間へもぐり、何言もなかったような風景がひろがる。壁に駆けよって王子を間一髪で受け止める。王子の顔は雪のように白かった。

— なんてことだよ、ヘビと話してたのか。

王子の首から金のマフラーをといて水にひたす。王子の口にふくませた。もう問いただす気もうせた。王子は真剣な目でわたしを見あげ、首にしがみついてきた。小銃で撃たれてこと切れる小鳥のような、はかない鼓動が伝わってくる。

— キカイ、足りなかったのが見つかってよかったね。やっとかえられるんだ。

— どうして知っているんだ。

言おうと思っていたことを先に言われた。思わぬ具合に飛行機の修理がついたのだ。

王子は問いには答えない。

— ボクもだ。ボクもかえられるんだ。

それから悲しげに言いたした。

— とおくて、たいへんだけど。

何かとんでもないことが起こった。そういう感じがする。幼子を抱くように王子を抱きしめた、王子は奈落の底へするりと落ちていきそうだ。なすすべを思いつかない。

王子は真剣な目で遠くを見つめる。

— ヒツジがいるし、はこもある。口輪だって。

それから悲しげに笑った。

わたしはじっと待った。王子が考え考えしているのがわかる。

— 君は怖かったんだね。

もちろん王子は怖かったのだ。けれどゆっくりと笑い、

— きょうのよるはもっとこわいよ。

また取りかえしのつかない思いにおそわれる。こころが凍りつくような気がする。

もうこの笑い声を聞くことがなくなる。そう思うことすら耐えられない。心の底からそう思う。王子の笑いはわたしにとって砂漠の湧き水に等しい。

— 君が笑う声を聞いていたい。

けれど王子は言った。

— きょうのよるで一年なんだ。ボクが落ちてきたのはちょうどきょねんで、このま上にボクの星がある。

— ヘビは、ただの悪い夢なんだろう。待ちあわせも、星も。

王子は問いには答えない。

— 大切なものは目には見えない。

— もちろんだ。

— 星だって同じ。あの星にいる花が好きだったら、夜星を見あげるだけでおちつくよ。花ざかりだね。

— もちろんだ。

— 水だってそう。飲ませてくれたとき、音楽みたいだった。滑車とつなで。おぼえてる？ たのしかったね。

— もちろんだ。

— 夜、ボクの星がどこにあるか、見せてあげる。小さすぎるけど、それもいいことなんだ。ボクの星はたくさんの星のひとつでしかない。だから空いっぱい星を見るとうれしくなるんだ。みんな友だちで。プレゼントだ。

王子はまた笑った。

— 本当に、君の笑う声をずっと聞いていたい。

— だからプレゼントだって。水が

— どういうことなんだ。

— 星は見る人にとってちがうんだ。旅をする人には道しるべで、他の人にはただの小さなあかり。学者にとってはなやみの種で、実業家には金（きん）だよ。でもどの星もなにも言わない。キミにとって星は、だれのものでもない。

— どういうことなんだ。

— 夜空を見たら、ボクはその中にいるんだから、ボクが笑ったら星がみんな笑ってるみたい。きこえるよ。笑う星をあげるね。

王子がまた笑った。

— それでほっとするんだったら、（いつだってほっとすることはできるよね）、ボクと会ってよかったと思うよね。ずっと友だちでいられる。いつでも一緒に笑えるよ。ときどき窓を開けて楽しい気分になる。空を見上げて笑いながら。「そうだね、星はいつも笑わせてくれる」 そんな

なキミを見てキミは友だちからおかしいと思われたりして。ネジがはずれちゃったとかね。

王子は笑う。

— 星のかわりにわらう鈴をあげるみたい。

王子はまた笑って、それからしんけんな顔になった。

— だから今夜、もう会わない。

— 君を離さない。

— ぐあいわるそうに見えるかもしれない。死にそうに見えるかもしれない。そういうものだもん。見にはこないで。こなくていいんだ。

— 君を離さない。

王子は首をかしげた。

— ヘビのこともあるよね。あのヘビにかまれちゃいけない。ヘビはいじわるだから、おもしろ半分にかむかも。

— 君を離さない。

王子はほっとしたようにつけくわえた。

— そっか。二度目はかんでもドクがないね。

この夜、歩きだした王子に気がづかなかった。抜けだすのに音も立てなかった。やっと追いついた時、王子はまっすぐ足早に歩いていた。

— いたんだ。

王子はそう言っただけだった。

そしてわたしの手をとって、

— そうじゃないんだ。自分をせめないで。ボクが死んだように見えても、ほんとうはちがうんだから。

わたしは何も言わなかった。

— わかるでしょう。とおすぎるんだ。このからだはもっていけない。おもすぎるからね。

わたしは何も言わなかった。

— からをぬぎすてるみたいなものなんだ。ぬけがらってかなしいよね。

わたしは何も言わなかった。

王子から力が抜けた。。けれどもう一度ふるいたつ。

— いいことだよ。ボクも星を見るんだ。どの星にも井戸がある。井戸にはさびた滑車がついていて、どの星もボクに水を飲ませてくれる。

わたしは何も言わなかった。

— ほんとに楽しいんだ。キミにとっては五億の星で、ボクにとっては五億の水のみ場。

そして王子の言葉がとぎれた。涙があふれていた。

— ここで、ひとりにして。

王子はしゃがみこんだ。こわかったのだ。

— 言ったよね。ボクは花をまもってあげる。花はとってもよわくって、シンケイシツで、なん

のやくにもたたないトゲがよっつあって、どうしようもない。

わたしも座った。もう立ってはいられなかった。王子は話しつつけた。

— だから、それだけで

王子はすこし迷って、それから立ち上がった。足を踏みだす。わたしはもううごけなかった。

王子の足首が黄色にひらめいた。王子は一瞬体をこわばらせ、声もあげず、まるで木が倒れるかのようにゆっくりと倒れていった。砂の上で物音ひとつしなかった。



## そして六年

---

そして六年がたった。このことは今まで誰にも話さなかった。生還して、仲間はとても喜んでくれた。けれどあの時わたしはとても悲しかった。ただ疲れているからとしか言えなかった。

最近やっと落ちついてきた。けれどまだまだ立ちなおってはいない。王子はきっと自分の星に帰ったのだ。朝目が覚めたら王子はどこにも見当たらなかったのだからだ。重い体ではなかった王子。そしてわたしは夜、星に耳をすますようになった。五億の星の鈴が鳴る。

大変なことを忘れていた。口輪をとめる革ひもをつけなかった。あれではひつじを止めきれない。ことあるごとに考える。星はどうなっただろう。ヒツジは花を食べたのだろうか。

いや、食べはしない。バラは無事にきまっている。夜になったら王子がガラスケースをかぶせる。それからヒツジをちゃんと見張るんだ。そう思って自分をおさめる。星がさざめき笑っている。

けれど、ちょっと気を抜けば一巻の終わりじゃないか。ある晩ケースをかけ忘れて、ヒツジがこっそり抜けだしたら。五億の星は悲しみにくれるだろう。大きな謎だ。わたしをふくめる、王子を好きな者にとって、知らないどこかにあるまったく別の世界で、見たこともないバラは今どうしているのだろう。

空を見上げて聞けばいい。ヒツジは花を食べてしまったのか。それで世界はどうか変わったのか。

そして大人はひとりとして、この謎の重大性をけっして理解をしやしない。

これがわたしにとって一番きれいで悲しい風景だ。これは前のページと同じ場所なのだけれど、覚えていてもらいたいからもう一度かいた。ここが王子が現れ、そして去っていった場所。

もしアフリカの砂漠に行くことがあったら、場所がはっきりわかるように、この絵をここにきざんでもらいたい。ここに来たら通りすぎずに、星の下ですこし足を止めてほしい。もしも子どもが近づいてきて、笑って、金の髪で、質問に何ひとつ答えなかったら、それはきっとあの子なのだ。きちんと話を聞いてあげて、それからわたしがふたたび笑えるように、戻ってきたと教えてほしい。